

第5章

陸上研修・船上研修の成果



陸上研修・船上研修の成果

今年度は、全八日間の陸上研修と、訪問国活動及び給油給水のために寄港したシンガポールを除く全26日間の船上研修が行われ、事業日数が増えたことに伴い、参加青年が全研修を通して活動する機会が増えた。特に、昨年度と比較すると、参加青年が自由に企画・運営できる「自主活動」及び異文化に触れ、多様な価値観を育む「文化交流活動（クラブ活動）」の時間を持つことができたといえる。

自主活動の目的はリーダーシップを発揮し、企画の立案・運営を実践するものであるが、プログラムが参加青年に与える効果を図るため、全立案者120人に立案及び運営を通じて、リーダーシップとマネジメントスキルを向上できたかを5段階評価で聞いたところ、5（大変効果がある）又は4（効果がある）と答えた者が75.8%となった。自主活動のうち、例えば「早わかりイスラム」については、「現在の世界状況にとってもマッチした内容だった。SWYは、メディアでの扱い方とは違ういろいろな個人の見方を知ることのできる機会だ（日本参加青年）」とのコメントがあった。

文化交流活動の目的は異文化対応力とコミュニケーション力を高めるものである。文化交流活動のうち、例えば「田植え踊り」については、「私は日本語と日本文化を専攻しているが、田植え踊りのことは聞いたことがなかった。田植え踊りをテーマに卒業論文を書きたいと思う。（スリランカ参加青年）」とのコメントがあった。

事業日数が伸びたことで、参加青年が自由に企画及び運営する機会が増え、自主活動を通じてセミナーでの学びを実践することができたといえるだけでなく、事業日数が短かったために昨年度は実施されなかった文化交流活動についても本年度は実施できたため、参加青年が異文化理解を深める時間を多く持つことができたといえる。

事業が参加青年に与えた効果を図るために、各プログラムについてプログラム内容に満足しているかを5段階評価で聞いたところ、4（満足している）以上が「ナショナル・プレゼンテーション」については97%、「クラブ活動」については91%となった。ナショナル・プレゼンテーションに関しては、「文化の多様性や多民族性を理解する助けとなりましたか」という質問に対し、5（大変良い）又は4（良い）と答えた者の割合が94%であり、そのうち大変良いと答えた者が64%と高い結果と

なった。そのほか評価が高かったプログラムについて、5（大変良い）又は4（良い）と答えた者の割合は、「異文化理解セミナー」については89%、「リーダー・シップセミナー」については86%、「PYセミナー」については79%となった。PYセミナーについては、41のセミナーが実施され、そのうち社会的分野を取り上げたものが約半数あった。参加青年は、様々なバックグラウンドをもった青年が主体的に企画及び運営するセミナーを通じて学びを深めただけでなく、コース・ディスカッションで取り上げられるテーマに関する学習と合わせて、社会貢献への意欲を深めることができたと考えられる。その裏付けとして、「SWYのプログラムの中で、PYセミナーが一番良かった。このような活動の時間を増やすべきだと思う。（ニュージーランド参加青年）」とのコメントがあった。

また、各研修の学びや成果を踏まえ、自身が今後取り組むべき社会貢献を企画する時間である「事後活動セッション」については、5（大変良い）又は4（良い）と答えた者の割合が74%となった。同セッションが、参加青年がプログラムで学んだ知識や経験をいかし、事業終了後の活動においても意欲的な姿勢を持つ上で一助となったのではないかと考えられる。参加青年からは「とてもやる気を起こさせてくれるものだった。既参加青年の生き方からいろいろと学ぶことができた。事業の終わった後に、どのように社会に貢献できるのかを知る助けになった。社会のためにできることについての私たちの知識を深めてくれた。」とのコメントがあった。

アンケート調査においては、全体スケジュールについても質問しているが、62%の参加青年が、「きつい」「きつすぎる」と回答した（「ちょうど良い」と答えた青年の割合は24%であった）。これは、昨年度のアンケート調査において同様に回答した青年の割合が78%であったことから比較すると低下している。また、事業期間について、異文化を理解して適応するのに十分であったかを質問したところ、33%の参加青年が、「短い」「短すぎる」と回答したが、54%の青年が「ちょうど良い」と答えた。昨年度のアンケート調査では64%の青年が「短い」「短すぎる」と回答したと比べると、事業期間が短いと考える参加青年の割合は半減したこととなる。本年度の事業から海外航路及び運航日数が伸びたことが、本プログラムに対する満足度にも影響したのではないかと考えられる。

コース・ディスカッション

1 ねらいと成果

ねらい

コース・ディスカッションは、「青年の社会貢献」を共通のテーマとし、地域づくり、防災、教育、環境、情報・メディア、青年起業の6コースを設定した。

主に、各分野について学ぶとともに、多国籍の参加青年が実体験に基づく発表や意見交換をすることで、各国事情について事例を通して理解を深める場として設定した。さらに、ディスカッションを通して、課題解決のために自ら取り組める分野を見付け出し、その実現に向けて具体的な活動を組み立てることをねらいとした。

各コースとも、参加青年同士の活発なディスカッションと交流を学習の主軸とし、各国が抱える社会問題や国を問わず共通して取り組むべき課題について理解を深め、事業終了後の社会貢献への意欲とスキルの向上を掲げ、参加青年一人一人の将来の具体的な活動の在り方を模索する機会を積極的に提供するコース作りを目指した。

コース・ディスカッションで期待される成果は以下の

とおりである。

- 自国の現状や課題について調べ、発表し、それに対するフィードバックを得ながら、コースでの学びをいかして今後、自分自身がどのようにリーダーシップを発揮し、社会に貢献できるかを考える。（情報収集力、発想力を身に付ける）
- 多国籍の参加青年と意見交換をし、各国の状況について「生の声」を聞くことで、各分野の実情への国際的理解を深める。（理解力、ディスカッション力、コミュニケーション力を身に付ける）
- 社会において、自らがアクションを起こせる活動が何か考え、企画する。（企画力を身に付ける）
- コース・ディスカッションやプロジェクトマネジメント・セミナーでの学びをいかし、事後活動に関する各自のアクションプランを作成し、自国に帰った後、活発に活動を実施する。（実践力を身に付ける）

成果

コース・ディスカッションの成果を、アンケート数値から評価する。

初めに、各国における社会課題や、若者による社会貢献活動に対する理解を深めることをねらいとして開催した「導入フォーラム」は、5段階評価で3（やや良い）以上が80%となり、コースの導入として十分に役割を果たしたと評価している。また、コースのテーマごとの理解を促進する目的で実施した東京での「課題別視察」への満足度は、3（やや満足）以上が90%を超え、日本における各分野の課題や取組に対する理解が深まったと評価できる。さらに、スリランカの訪問国活動においては、コース別に実施された「課題別視察」の満足度は4（満足）以上が81%にのぼり、訪問先での活動がコースの学びに大きく貢献していたことがうかがえる。

英語力について検証すると、ディスカッションを行うのに自身の英語力は十分であったか、という質問に対し、日本参加青年は2（やや不十分）と回答したのが全体の47%、1（不十分）と回答したのが13%という結果であり、日本参加青年の半数が、自分の英語力が十分でないと回答している。同じ質問に対して、2と1を選んだ外国参加青年はいずれも0%であったことから、両者の英語力に大きな差があったことがうかがえる。しかし、

コース・ディスカッションのうちでどのような活動がテーマの理解に役立ったか、という質問に対しては、七つある項目の中で、日本参加青年、外国参加青年の両方が、「小グループでのディスカッション」を一番多く選択し、個々の語学力に差がありつつも、少人数で行われた参加青年同士のディスカッションが、学びの面で大きな役割を担っていたことを示している。

次に、コース・ディスカッションへの参加具合についての質問に対し、3（まあまあ参加できた）以上が89%を超え、参加青年が前向きに取り組んだことが理解できる。ただし、4以上と比較すると外国参加青年が73%であったのに対し、日本参加青年は42%にとどまったことから、両者の参加具合には開きが見られた。一方で、昨年度と同じ質問への回答と比較すると、4以上を回答した外国参加青年は、昨年度と変わらず73%であったことに対し、日本参加青年は昨年度の31%から、10%以上伸びたことが分かる。これは事業期間、特に船上研修の期間が長くなり、セッション回数が増やせたことや、セッションとセッションとの間にファシリテーターによる補講や参加青年が自分自身で予習や復習をする時間が確保できたことで、特に英語力に自信がない日本参加青年についても授業の中身に対する理解を深めることができる

ようになり、それが参加意欲につながったと考えられる。

最後に、コース・ディスカッションの総括として、各コースが成果を発表する「サマリー・フォーラム」への評価は、5（すばらしい）及び4（良い）への回答の合計が84%となり、参加青年がコース・ディスカッション

全体を通して得た学びを、成果として十分に発信できたことが数字に表れる結果となった。これらの評価から、コース・ディスカッションが事業の主軸としての役割を十分に果たし、参加青年が、それぞれの分野において知識や意欲を向上させることができたと評価できる。

2 導入フォーラム

「青年の社会貢献」をテーマとした導入フォーラムは、コース・ディスカッションの幕開けとして開催された。参加各国の代表は、自らの社会活動を通してどのようにコミュニティに貢献しているかを発表した。映像や写真、そして実際の経験談を取り入れたプレゼンテーションを通して、参加青年（PY）は発表者の行ってき

た様々な活動について学んだ。また、発表後には質疑応答を行うことで、より深い理解を得ることができた。

PYは各国の代表によるプレゼンテーションを通して、コース・ディスカッションへの参加意欲を高めただけでなく、プログラム後に社会へ貢献する方法について学んだ。

国名	発表者/テーマ/内容
オーストラリア連邦	発表者: Megan Lock テーマ: 青年主導のボランティア活動の事例紹介 内容: 教育の機会に恵まれない又は教育格差の問題に直面している生徒に対する、オーストラリアの学校教育における支援活動。青少年が生徒たちの相談役となることで、経済的な困難を乗り越え、先住民に対する差別などを無くし、誰もが等しく教育を受けられるような社会を形成することを目的としている。
バーレーン王国	発表者: Abdulla Behzad, Ebrahim Akbari, Mohamed Mahmood, Noora Thani, Walaa Almalki テーマ: 若者が取り組む社会課題の解決 内容: バーレーンでは9～25歳の青少年を対象に、リーダーシップ、メディア、科学などコース別に学ぶ夏季研修が実施している。また、地域の課題に耳を傾け、家屋や公共施設の修復に取り組む活動が行われている。いずれも青年が主体となり、活動を支えている。
チリ共和国	発表者: Oscar Contreras Villar roel テーマ: STEM教育を通じた社会貢献 内容: 自然科学や科学技術、工学、数学を対象分野として、チリ政府とNPOは青少年の教育プログラムを実施している。学校教育とは別に、サマー・キャンプや放課後のプログラムを充実させることで、社会変革に貢献できる人材を育成している。 STEMとは「科学」「技術」「工学」「数学」の英語表記のそれぞれの頭文字
インド	発表者: Pawan Singh テーマ: 青年の活躍のためのインド政府の取組 内容: インド政府は、貧困削減と雇用の拡大を目指し、伝統工芸や地方の産業において、生産性の向上プログラムを実施するとともに、国内外からの投資を広く呼び掛けている。若者が先端技術と伝統技術の両方についての知識とスキルを習得するために、政府は様々な研修を実施している。
日本国	発表者: 岩崎咲穂、清水葵、高木超 テーマ: 東日本大震災の被災地におけるボランティア活動 内容: 震災から4年が経った東日本大震災の被災地では、緊急支援の需要はないものの、復興に向けた人々の営みにはボランティアの需要はまだある。漁師や農家の手伝いを通して、ボランティア活動の目的や成果を明確にすることの重要性について考える。
メキシコ合衆国	発表者: Violeta Garcia Diaz テーマ: 新しいISWYの選考過程について 内容: PYが事業への参加に先立ち十分な準備ができるように、ex-PYが主体となって選考と事前研修を実施している。近年、情報共有のためのウェブサイトの立ち上げや運営、国内のボランティア活動への参加を通じたチームワークの強化などを行っている。

国名	発表者/テーマ/内容
ニュージーランド	発表者: Angela Lim, Hoani Te Whare, Porera Hakaraia, Shaymaa Arif テーマ: 地域づくりにおける青年の活躍 内容: ニュージーランドでは、地方自治体が青少年の声に積極的に耳を傾け、市町村としての意思決定や、行政が管轄するイベントなどの仕事の一部を青少年団体に任せている。
ロシア連邦	発表者: Aisylu Nabiullina, Anna Moroz, Daria Buchakova, Katerina Rossolovich, Karina Subbotina テーマ: ロシアのPYによる社会貢献 内容: ロシアのPYが取り組んでいる社会貢献活動。例えば、動物保護や環境保全を中心に活動する団体や、伝統文化の理解と継承への取組、移民の児童に対するロシア語教育など、異なる地域から集まったPYが、それぞれの地域で行っている活動を実体験に基づき説明する。
スリランカ民主社会主義共和国	発表者: Kelum Dasanayaka テーマ: スリランカの英語教育プログラム 内容: スリランカには優秀な人材であっても、英語能力が不十分なために国際社会で活躍できないということが多々ある。自分たちの世代及び次世代の活躍の機会を広げることを目的とし、若者が英語教師と協力し、ボランティアで英語教室を運営している。
タンザニア連合共和国	発表者: Amani Georey Nkurlu, Kabwe Tulinagwe Mwenge テーマ: タンザニア青年による青少年育成活動 内容: タンザニアが直面する貧困などの社会課題を乗り越えるために、教育、健康、生活インフラの整備などの分野でPYが行っている活動を紹介する。地域におけるリーダーシップ研修や、新しい農業手法の開発と実演、大学でのキャリア・カウンセリングなど、それぞれが専門をいかしたボランティア活動及び青少年育成活動を実施している。
アラブ首長国連邦	発表者: Hamad Alseyabi, Mohamed Al Shateri テーマ: 教育とキャリアを支援する青少年団体の取組 内容: 社会起業家を中心となって、社会問題や企業が取り組むべき社会貢献活動について理解を深めるためのプログラムを運営している。また、青少年が進学や卒業する際に、進路や就職のアドバイスを受けることができるキャリア・カウンセリングの団体も活発に活動している。

3 課題別視察

1月26日には、六つのコースの内容に即した課題別視察を実施した。各コースにはボランティアが同行し、ス

ムーズな運営に協力した。

地域づくりコース（株式会社HITOTOWA/いたばしコミュニティスペース連絡会）

午前中はオリンピックセンターにて、日本の家族と住まいの現状・問題・解決策について話を聞いた。発表者は、26歳以下の若者が日本の都市計画や町づくりを学ぶ、株式会社HITOTOWA「Neighbors Next U26 Project」のメンバーの二人。発表の後は、国ごとの家族支援制度の違いや、発展途上国・先進国それぞれで異なる家族が抱える問題について、質疑応答や意見交換が活発に行われた。

その後、バスで東京都板橋区の高島平団地へ。ここは終戦後のベビーブームを背景に造られた大住宅地だが、

時代とともに高齢化が進み、現在、住民の50%以上が65歳以上である。そのうち半分は一人暮らしだ。このような高齢者の交流の場、高齢化に伴う様々な問題解決に取り組む拠点として、高島平には「コミュニティ・カフェ」が数多く存在する。PYはいたばしコミュニティスペース連絡会の案内の下、特色ある4軒のカフェをグループに分かれて見学した。PYは、コミュニティ・カフェが高齢者のためだけでなく、若者・外国人・子育て世代・障害のある方など、誰に対しても開かれた場であることを実感していた。

防災コース（特定非営利活動法人国際協力NGOセンター（JANIC）/本所都民防災教育センター）

午前は日本最大のNGOネットワークを持ち、NGO同士の協力をサポートしている特定非営利活動法人国際協力NGOセンターを訪問した。JANICの理事（前理事長）であり、防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）共同代表でもある大橋正明氏から、日本のNGO団体やJANICの活動、防災対策の重要性、国際的な防災の取組について講義を受けた。

大橋氏の話の伺う中でPYが最も衝撃を受けていたのは、大橋氏が東日本大震災の時に撮影した写真だった。PYの中には被災体験がない人たちもいたため、災害の恐ろしさにしっかりと耳を傾けていた。また、時折大橋氏が自国の災害被害等について質問をするなど、PYとの交流を図りながら講義されたお陰で、PYも講義の中でも質問するなど、積極的に発言していた。質疑応答では、日本の中で最も重視している災害は何か、自国と日

本のNGOで防災に関するつながりはあるかなど様々な質問があり、国を越えた防災の重要性を改めて認識した。

午後は本所都民防災教育センター（本所防災館）を訪問した。まず20分の地震・津波など防災をテーマにしたビデオ「3.11その時私たちは何を体験したのか」を見た。その後2グループに分かれ、四つの災害を体験した。地震の体験では、都市直下型と東日本大震災の二種類の揺れを体験し、同じ地震でも揺れ方の違いや映像で見る物との違いに驚くPYが多かった。暴風雨体験では、初めはそんなに怖くないと感じていた者も、終盤では物にしがみつかないと立ってられない怖さを実感した。そして、火災の消火体験と煙体験では、暗く煙の立ち込めた通路の中で、自ら携帯電話の明かりをつけるなど、積極的に自分から動くことの大切さを学んでいた。

教育コース（株式会社a.school / 放課後NPOアフタースクール）

文京区にあるa.schoolを訪問し、代表の岩田拓真氏から話を伺った。a.schoolは日本の従来の教育方法とは対照的に、生徒自身が学ぶ楽しさに気付き、探究できるような学びの場を提供する次世代の学習塾である。

当日は、トークセッションとワークショップを元に行進した。4人程のグループに分かれ、トークセッションではPYが自国の教室形式について議論し、ワークショップでは日本についての「なぜ」を問う質問について考えた。教室形式についての議論では、各国での違いが明確となった。生徒がどう座るか、先生の場所はどこかという点だけでも各国の学びに大きな違いを与えており、PYが大きな関心を示していたことが印象的であった。

午後は上板橋第四小学校を訪問し、放課後NPOアフタースクールの渡部岳氏から話を伺った。ここは学校の校舎や地域の人々を活用して、放課後に安全で安心できる場所と学びの機会を提供しているNPOである。織畑氏の講義は、PYが日本の子供が抱える問題に理解を深める機会となった。子供を狙った犯罪や近隣からの苦情等を要因に、放課後を一人で過ごす子供が増加しているということが例に挙げられる。

また、PYと子供たちが面子や駒などの日本の伝統的な遊びを一緒に行き交流した時間では、言語の壁を超え、教室全体が歓声にあふれる盛り上がりとなったのが印象的だった。

環境コース（国連世界食糧計画 / 東京都廃棄物埋立処理場）

午前は国連世界食糧計画（WFP）より政府調整官の中井恒二郎氏を招き、環境問題と世界の食糧事情との関わりを講義とディスカッション形式で学んだ。まず中井氏よりこれまでの業務経験やWFPの組織について、写真やエピソードを交えながら紹介があった。次に講義は、気候変動と飢餓はどう関係しているか 気候変動の影響を軽減するためにWFPは何をしているか あなたが実際にできることは何か、という三つの問いに沿って進められた。ディスカッションは盛り上がりを見せたが最後の問いは難しかったようで、PYは学んだことを行動にどう移すのかについて改めて考えていた。またPYが自国での経験を共有する場面も見られた。

午後は東京都廃棄物埋立処理場を訪れた。実際の埋立地がどのようなになっているのかをバスの車窓からと外に出て見学した。PYは特に、大きい不燃物が細かく砕かれる処理過程や機械に興味を持っていた。また実際に埋め立てられた場所に立つことで、ごみが埋め立てられることを肌で感じる事ができた。その後室内で、埋立の現状や取組、抱えている問題などについて講義を受けた。今埋立をしている場所が満杯になると、新しい場所を確保することが難しくなってしまう。PYはごみをいかに減らすことができるのか、またそれぞれの国では何ができるのかを考え、議論した。

情報・メディアコース（株式会社博報堂／株式会社フジテレビ ホウドウキョク）

博報堂の兎洞武揚氏を講師に招き、地域の魅力のブランド化・町づくりの取組事例について伺った。相模大野の事例では、民間企業・公的機関・NPOが協力して市民の対話の場を設け、市民と町、商業施設がwin-winとなる新しいプロジェクトが多数生まれたという。また、ネガティブな表現（「～してはいけない」）を使った言葉とポジティブな表現（「～しましょう」）を使った言葉でメッセージの伝わり方が異なることや、ニッチな需要が世論に影響を与えるまでの過程に関するトランジションセオリーを学んだ。

PYは「共創」をテーマに、利益追求と社会問題への取組の双方を実現することは可能か、関係者全員が納得する決定を行うことは可能か等の議論を深めた。その結果、「社会に変化を起こすにはプロジェクトの成功だけでなく、その過程で対話を深めコミュニティを作ることが大事だと実感した。」と話した。

午後は株式会社フジテレビジョン報道局マルチメディアニュースセンター「ホウドウキョク」チーフプロデューサーの清水俊宏氏よりインターネットメディアとしてのテレビの話を知った。「日本の若者はテレビよりもインターネットに触れる。フジテレビが配信するニュースは1日に5回あるが、その時間ピッタリにニュースを見ることは少ない。『ホウドウキョク』は見たい時に見るというオンデマンドな考え方。ライブとアーカイブの2本立てで番組をやっているため、“今”のニュースを伝えることができ、視聴者に安心感を与えることができる。」との解説があった。また、今後の可能性として、「今はどこにでもニュースが届けられるので、日本にいる外国人や海外の人にも分かるように英語発信をしていきたい。」と述べていた。この見学を通じて、新たな日本のメディアの形を知った。

青年起業コース（株式会社HASUNA／パクチャーハウス東京）

日本初のエシカルジュエリーブランドHASUNAを立ち上げた白木夏子氏によるセッションは、社会起業家と起業家の違いは何か？という問いかけから始まった。英国留学時代の経験や、インドの鉱山で暮らす人々との出会いから「現地で自ら原料を買い付ける」新しいビジネスモデルを立ち上げた経緯を知った。PYからはビジネスとして成功した秘訣や、戦略についての質問も多く、同時に社会起業とは何か、というテーマに対し全体で議論が活発に起こった。自身が情熱を持ち社会に良い影響や価値を創りだす分野でカタリストとしてリーダーシップを発揮することが必要だ、という気付きを得た者も多かった。

その後、「交流する飲食店」がコンセプトのパクチャー料理専門店、パクチャーハウス東京を訪問した。この店は、第10回「世界青年の船」事業のex-PYである佐谷恭氏が創立した株式会社旅と平和の事業の一つである。PYはパクチャーハウス東京で昼食をとった後、佐谷氏が

ら事業の紹介と起業や事業モデルの発想、経営について講義を受けた。

パクチャーは日本ではまだ馴染みの薄い食材であるが、多くの方は旅や外国料理店を訪問した際などの異文化交流の過程でパクチャーと出会っている。佐谷氏は自身の世界を旅した経験から、旅での非日常的な体験を日常的なものにしたいという思いを抱いた。食を通じた異文化理解は平和の第一歩であると考え、パクチャーを「旅と平和の象徴」とし、パクチャーを中心とする飲食店を開業した。他にも、シェアオフィス事業「PAX Coworking」や、ランニングイベント「シャルソン」など、人と人をつなげる事業を展開している。

質疑応答を通して佐谷氏から、世界の平和は挨拶や食事などの日常の小さな事から創られるという視点や、目先の利益よりも自身の実現したい概念を重視するというビジネスに対する考え方に触れた。この訪問を通して「旅人は平和を創ることができる」ということを学んだ。

4 コース別の活動と成果

地域づくりコース

副題：「共創」の力 地域住民と共に創る社会変革

ファシリテーター：鈴木英理

参加青年：41名（JPY 22名、OPY 19名）

1. 目的とねらい

コースの目的

過疎・高齢化、生産性の低い農業、若者の高失業率、劣悪な医療環境と廃棄物処理システム、安全な飲料水不足、電力不足、住宅不足など、世界各地の地域社会が抱えるニーズや課題は常に多様で複雑である。これらの課題を解決するためには、ただ漠然と社会変革を試みるのではなく、実際にその土地、地域に住んでいる住民の意見に耳を傾け、PY一人一人が社会変革のためにどんな価値を提供できるのか明確にすることが肝要である。このコースでは、一人一人が地域の課題とニーズを正確に見極め、地域住民と共に社会変革を行うことができるようになることを目指す。

コースのねらい

本コースではデザイン思考を活用し、地域社会が抱える課題を解決するためのアプローチ方法を習得する。「デザイン思考」とは観察から洞察を得て、共感し、仮説を作り、アイデアを出し、プロトタイプ¹を作って、それを検証し、試行錯誤を繰り返して改善を重ねながらモノ（製品／サービス）を創り出す創造的なアプローチ方法を指す。また講義やワークショップ、ディスカッションなどを通して、PY自身が持つ知識やノウハウを最大限に活用し、地域を問わずインサイダーであってもアウトサイダーであってもその地域社会のニーズに応じた課題解決を可能とするための応用力を身に付ける。

2. 事前課題

- 以下の例を参考に、3分間のエレベーター・ピッチ²の動画を英語で作成し、コースのFacebookコミュニティ・グループにアップロードすること。なお、エレベーター・ピッチはコース中でも発表するため十分に練習を重ねること。

例：https://www.youtube.com/watch?v=uRIiIVf8T_s

<エレベーター・ピッチの内容>

- 自己紹介：名前、出身国、出身地域
- 問題の定義：自分が住んでいる地域において解決したい課題（解決したいと思った理由を含めて）、その課題を取り巻く現状、地域社会におけるその課題の位置付け
- 解決策の提示：解決策の提示、課題の解決によって生まれる変化とチャンス
- 取組の宣言：『～の解決に取り組みます！』

ネット環境などの理由で動画をアップロードできない参加青年限定

動画3分に相当する英語の原稿（1,000ワード前後）をコースのコミュニティ・グループにアップロードすること。

- 以下の参考文献を事前に精読し、本コースで取り扱うデザイン思考の基礎的な知識を整理しておくこと。

参考文献

IDEO社著『The Field Guide to Human-Centered Design』

¹「プロトタイプ」とは初期のアイデアを検証するために、実際に目で見て、手で触れることができる具体的な提案を指す。

²「エレベーター・ピッチ」とは、実際にエレベーターで行うプレゼンテーションではなく、エレベーターが昇降する間のわずかな時間で要点を端的に説明するために生まれた手法で、プレゼンテーションの内容をまとめるのに有効な手段として知られている。

3. 5回のセッションの概要

セッション 1: デザイン思考の紹介	
目的とねらい	活動の内容
デザイン思考の基礎を学ぶ 共感の仕方を学ぶ	オリエンテーション: コースの全体像 / 進め方、PYの目標の共有、安心して発言 / 質問できる空間作り 講義: プロジェクトの失敗事例とデザイン思考の概要 ワークショップ: ミニアイデアチャレンジ PYによるグループ発表: プロジェクトのアイデアの発表とフィードバック 講義: デザイン思考の第1段階である「共感」の紹介 ワークショップ: PYが最も興味を持っている地域課題をエレベーター・ピッチとして他のPYに伝える
このセッションの主な学びと成果	
<p>デザイン思考は地域社会が抱える様々な課題を解決するための一つのアプローチ方法であることを学んだ。またデザイン思考のプロセスは必ずしも直線的ではなく、時には循環し、時には反復するプロセスであることを学んだ。更に従来のトップダウン型の地域づくりと違い、デザイン思考を活用した地域づくりは地域住民を中心に置いたボトムアップ型の地域づくりであることに気付いた。PYはミニデザインチャレンジに参加し、ケニアにおける水の輸送問題や貯蔵問題の解決策を小グループで提案し合い、全体の前で発表した。地域特有の背景・条件・制約など、限られた情報を基に解決策を生み出すことがいかに困難で複雑であるかミニデザインチャレンジを通じて再認識した。</p> <p>革新的なテクノロジーで安全な飲料水を地域住民に調達する揚水ポンプを開発した南アフリカの市民団体が、資金調達に成功し海外展開に挑んだ矢先、揚水ポンプが機能しなくなり製造中止となった失敗事例を全体で分析した。PYは事業企画と現実のギャップを考察し、様々な失敗要因について議論した。モノ(製品/サービス)を創り出す過程で地域住民のニーズや声をくみ取り、解決策を共創することが持続可能な地域づくりにつながることを再確認した。</p> <p>デザイン思考の第1ステップである「共感」について話し合い、「同情」との違いを明確化した。地域住民に寄り添うためのマインドセット作り及び観察から洞察を得て、地域住民との交流を深め、住民のニーズや不便を肌で感じることで初めて地域住民に共感できることを学んだ。</p> <p>各PYは最も興味を持っている地域課題をエレベーター・ピッチとして全員の前で発表し、お互いから異文化の地域課題を学ぶことができた。</p>	
セッション 2: 地域課題の問題設定	
目的とねらい	活動の内容
地域課題の定義の仕方について学ぶ 地域課題を定義する	ディスカッション: 課題別視察で見学した高島平団地コミュニティスペースのSWOT分析 ³ と振り返り 講義: セッション1の復習とデザイン思考の第2段階である「問題の定義」の紹介 ワークショップ: 各地域課題のデザインブリーフを作成 ディスカッション: 各地域課題の地域住民の1日の流れを考える ワークショップ: 各地域課題の地域住民プロフィールを作成 PYによるグループ発表: 地域住民プロフィールの紹介 講義: 地域課題に関わっている関係者の利害、期待、影響度を考える PYによるグループ発表: 問題定義を紹介
このセッションの主な学びと成果	
<p>デザイン思考の第2ステップである「問題設定」について話し合った。</p> <p>PYは特定した八つの異なる地域課題ごとに小グループに分かれ、それぞれの地域課題のクライアントと依頼内容を明確化した。また地域課題によって、クライアントとユーザーが異なることも理解した。</p> <p>選ばれた八つの地域課題について、提案した8人のPYが架空の地域住民(ユーザー)の役割を演じ、他のPYはデザイナー(コンサルタント)の役割を演じるワークショップを実施した。デザイナーは地域住民をインタビューし、地域住民の1日の流れを把握することで地域住民のニーズへの理解を深めた。また架空の地域住民のプロフィールを作成し、一般の人物像を用いて思考を行うことにより地域課題が具体化した。</p> <p>課題別視察の振り返りを行い、少子高齢化が進む高島平団地で地域福祉の向上や地域の包括的ケアシステムの構築に挑む地域住民らが自ら立ち上げたコミュニティスペースに着目し、高島平団地の今後の発展と課題について意見交換をした。PYは行政、医療介護事業者、福祉団体、民間企業等の連携促進がより持続可能な運営へとつながることを理解した。</p>	

3 SWOT分析とは事業分析法の一つ。ある事業について、強み、弱み、機会、脅威を判定し、経営課題を導き出す。SWOTはstrengths(強み)、weaknesses(弱み)、opportunities(機会)、threats(脅威)の頭文字語。

セッション 3: アイデア創造	
目的とねらい	活動の内容
<p>地域課題の解決案を模索するブレインストーミング法を学ぶ プロトタイプを作るためのアイデアを選択する</p>	<p>講義: セッション2の復習とデザイン思考の第3段階である「アイデア創造」の紹介 ワークショップ: PYが選ぶ地域課題を書き出し、その中から一つ問題を選び、定義する 講義: 地域住民のニーズ把握 講義: ニーズを満たすモノ(製品/サービス)が住民の元に届くまでの生産・供給などの業務活動のマッピングについて ワークショップ: 質より量を追求し地域課題の解決案となり得るアイデアを思いつくままに書き出す 講義: 集団でアイデアを書き出し、異なる地域社会の課題に共通する要素を発見したり、視点を変えたりすることでアイデアの可能性を広げる ディスカッション: それぞれのアイデアの前提条件や仮説を分析し検証する ディスカッション: 様々なアイデアを比較評価する</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>PYは特定した八つの異なる地域課題ごとに小グループに分かれ、漠然とした地域課題を分類し、掘り下げて考察した。複数書き出した問題の定義を「インパクト・イノベーションマトリックス」手法で分類し、最も効果的で革新的な問題定義の一つを選択した。最後に設定した問題定義を簡潔にまとめ全員の前で発表した。 デザイン思考の第3ステップである「アイデア創造」について話し合い、概念を理解した。 PYは特定した八つの異なる地域課題ごとに小グループに別れ、ブレインストーミング法を用いて20個の解決案のアイデアを思いつくままに書き出した。またブレインストーミング法以外にアイデアを創造する手法を学んだ。</p>	
セッション 4: プロトタイプ作り	
目的とねらい	活動の内容
<p>選択したアイデアのプロトタイプを作成する</p>	<p>講義: プロトタイプとは ワークショップ: マシュマロチャレンジ(失敗を重ね、ベストなアイデアを実践するエクササイズ) ワークショップ: アイデアをプロトタイプにする PYによるグループ発表: 作成したプロトタイプの紹介</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>デザイン思考の第4ステップである「プロトタイプ」について話し合い、概念に対する理解を深めることができた PYはマシュマロ1個とパスタ20本と紐とセロテープとはさみを使用し、マシュマロを頂点に置いた塔のオブジェを作るという課題に挑戦した。20分以内に一番背の高いオブジェを作ったチームが優勝となる。早期に失敗を重ね、その学びを次に反映する試行錯誤、プロジェクト実施におけるリーダーの役割、計画と準備の方法、そしてお互いの意見に耳を傾けるチームワークの重要性についてゲームを通じて学んだ。 PYは特定した八つの異なる地域課題ごとに小グループに分かれ、それぞれの地域課題の解決策のプロトタイプを作った。アイデアを形にすることで解決案が具体化することを知った。</p>	



セッション 5: 持続可能な解決案の作成	
目的とねらい	活動の内容
地域課題に対する持続可能な解決案を作成する	<p>講義: 地域住民からフィードバックを獲得する重要性 ディスカッション: デザイン評価の四つの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> • 価格 • 使いやすさ • 持続可能性 • 失敗した場合の対応 <p>ワークショップ: ビジネスモデル・キャンバス手法⁴を使って具体的な解決案を作成する PYによるグループ発表: 解決案の発表 ディスカッション: 「社会変革者」としての役割と自国に戻った後の地域づくり活動</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>デザイン思考の第5ステップである「テスト」について話し合った。ユーザーからプロトタイプのフィードバックを獲得し解決策を改善していく過程で価格・使いやすさ・持続可能性・失敗した場合の対応など想定されるユーザーからのフィードバックについて議論した。</p> <p>PYはインドの課題別視察で訪問したザ・パニヤンの組織活動を収入・支出・付加価値・顧客区分・顧客関係・経路・主な活動・主な資源・主な提携の九つの要素に分類し持続可能な組織作りを検証した。</p> <p>PYは特定した八つの異なる地域課題ごとに小グループに分かれ、セッション4で作ったプロトタイプの収入・支出・付加価値・顧客区分・顧客関係・経路・主な活動・主な資源・主な提携の九つの要素を考察することで、より現実的で持続可能な解決案に落とし込んだ。最後の振り返りでは「社会変革者」としての役割と自国に戻った後の地域づくり活動について意見交換した。</p>	

4. ファシリテーターのコメント

地域づくりコースでは合計35時間に及ぶ講義やワークショップ、ディスカッション、施設訪問などを通して、11か国を代表する41人のPY一人一人が持つ知識やノウハウを最大限に活用し、地域社会のニーズに応じた課題解決を可能とするための応用力を身に付けることを目指した。6週間の事業期間中、コースの顔合わせから始まり、5回のコース・ディスカッションと、日本、インド、スリランカにおける3か国の課題別視察に加え、それらの課題別視察や最終発表の準備に向けた4回の補講、学びの集大成を発表するサマリー・フォーラムを含む14回のセッションを共にし、地域づくりへの理解を深めた。その最終成果はオーストラリア、パーレーン、日本、メキシコ、ロシア、タンザニアにおける八つの地域課題に応じた課題解決案のプロトタイプである。

PYはコースの事前課題として、出身地域において自身が最も興味を持っている地域課題について調査し、動画を用いて情報共有した。自身の地域の課題への知識を養い、また他国が抱える、異なる地域課題に触れることによって、地域づくりへの関心を深めた。またPYはIDEO.org社著『The Field Guide to Human-Centered Design』を事前に精読し、コースで取り扱うデザイン思考の基礎的な知識を習得した。

PYはコース・ディスカッション中「デザイン思考」

の5段階ステップを習得した。「デザイン思考」は観察から洞察を得て、共感し、仮説を作り、アイデアを出し、プロトタイプを作って、それを検証し、試行錯誤を繰り返して改善を重ねながらモノ（製品／サービス）を創り出す創造的なアプローチ方法であることを学んだ。また、事前課題で各自が持ち寄った地域課題の中から八つの地域課題を選択し、「デザイン思考」をコースで実践することで解決案を提案した。

例えば、メキシコ中西部の都市グアダハラで生活する貧しい女性のエンパワメントを題材に選んだグループは、子育て援助、ファイナンシャルプランニング、芸術のワークショップなど、包括的なサービスを提供する施設を提案した。また、ロシアで急増する捨てられたペットの野生化の問題に取り組んだグループは、行き場を失った動物を活用したサービスの提供や動物保護の認知度を高めることを目的とした施設を提案した。オーストラリアの若者の高失業率に取り組んだグループは、若者に様々なスキルとノウハウ及び地域社会に貢献する機会を提供するオンラインのネットワークを提案した。深刻化するオーストラリアの若者の自殺問題に取り組んだグループは自殺を試みている若者の家族や友達を専門家が支援するプロフェッショナル・ピア・サポート・センターを提案した。飯能市の核家族世帯の課題に取り組んだグループは地域の高齢者と若者が「市民先生」とな

4 ビジネスモデル・キャンバス手法とは組織活動を九つの要素に分類し、それぞれがどのように関わり合っているかを描き出すことによって新しいビジネスモデルを創造するテクニックのこと。

り、専門とする分野の講義を行い子供の教育を地域全体でサポートする学習センターを提案した。日本のワークライフバランスの向上に取り組んだグループは会社の中に親子揃って利用できる家族スペースを作り、カウンセラーや家族のための情報を設置することを提案した。タンザニアのストリートチルドレンの問題に取り組んだグループは子供を持つ親にストリートチルドレンについて認知度を高める教育をしつつ、ストリートチルドレンを支援するための募金を募る施設を提案した。バーレーンのスマートフォン中毒問題に取り組んだグループは一般市民が顔を合わせて対話できる場所を多く確保することを目的として、スマートフォン使用不可のカフェを提案した。

海に囲まれた船という環境で、情報へのアクセスがないため、情報収集が非常に難しく、PYの多くは与えられた地域課題の背景を理解するのに苦労していた。また、架空の問題を解決することの厳しさを体験した。船の環境では地域住民にアクセスができないため、作った解決案について地域住民から洞察を得たり、地域住民が抱える困難に共感したり、解決案のプロトタイプを試し、地域住民からフィードバックを獲得することができないなどの困難があった。それにもかかわらず、上記のようなアイデアを提案し、可能な限り検証ができたことはコースの成果だと言えるだろう。

テクノロジーの発展とグローバル化により、世界各地の地域社会が抱えるニーズや課題は今まで以上に複雑化し、幅広い社会問題に対応できるリーダーが求められている。このコースを通じ、PYが今後、どのような地域における課題にも対応できるような、問題解決のアプローチ方法や、クリティカルシンキング能力、創造力、コミュニケーション能力、コラボレーション能力を養うことができたことを確信している。

5. 参加青年の感想

後藤杏奈（日本）

地域づくりコースについてまず思うことは、このコース独特の難しさがあったということです。

11か国の青年が、それぞれ自国における地域課題や自身の活動分野を紹介し始めると、このコースで共に学ぶ意義や面白さを感じるのと同時に、扱う題材の範囲の広さや、奥の深さが明らかになりました。特に、開発や地域づくりという言葉の意味合いや、抱えている課題の質が、国や地域によってあまりにも異なっていたため、コースを進める上で難しさを感じました。

例えば、日本における大きな課題の一つとして、少子高齢化や社会からの孤立などが取り上げられたことがありました。一方タンザニアからは、深刻なストリートチ

ルドレンの問題、オーストラリアからは、先住民族のアボリジニの権利に関する問題などが挙げられました。改めて地域による課題がかなり異なることを再認識した瞬間でした。

自国の社会にとっては馴染みの薄い海外の問題を、まず基礎から理解し、議論することは容易ではありませんでした。印象的だったのは、日本の高齢者の孤立に関する議論です。タンザニアやスリランカの青年からは、「まずなぜお年寄りが独りになるようなことがあるのか、自国では考えられない」という声が多くありました。しかしこうした外側からの視点や疑問が、学びを深めることに大きく貢献したのだと思います。返答に戸惑いを持ちながらも、JPYは根本的な原因や社会構造をより深く考えることができました。

また、別の場面としては、スリランカ内戦について学んだときのことをよく覚えています。戦争や紛争の構造に関する議論の際、インドとスリランカの青年たちの中で、主張の違いが垣間見え、議論が白熱したのです。私たちは、同じ内戦に対して、それぞれの異なる視点や解釈があることを目の当たりにし、一瞬その場に緊張が走りました。こうした国際的な議論の場においては、国際情勢やそれぞれの国家間関係への十分な配慮が重要であるということ、皆が実感した瞬間でした。コース・ディスカッションは、PY一人一人にとって、こうした忘れがたい場面を提供し、私たちの学びを豊かにしてくれました。

多様な人々との学びは、非常に意義深く、楽しいものだと実感しました。他国が持つ様々な社会問題を知り、生の声を聞くことで、それまで客観視していた私たち自身に、当事者意識が生まれたのです。更にPYの中には、実際に地域づくりの分野で仕事をしている人も多く、彼らのプロとしての経験や視点が、コース・ディスカッション全体の学びに大きく貢献してくれました。

自分が国や地域による「違い」にばかり目を向けていることに気付いたのは、プログラム前半の頃でした。コース・ディスカッションでは「違い」から生じる困難や学びを実感する場面が多くあったからでした。しかし地域課題を考え、解決策を模索する中で、変化がありました。私たちがどれだけ共通のものを持っているか、という点です。衝突することはありながらも、同じような社会課題に怒りを感じ、共感を深め、問題意識を高めていくことができるということを実感しました。

「私たちは地球の一員として将来に向け何を目指して行くべきか」

根本をたどれば、皆が見ている方角は決して離れていなかったように思います。だからこそこの学びを最大限いかし、これからもPYの仲間と共に活動を続けていきたいと感じました。

防災コース

副題：地域防災力を高めるリーダーシップ 市民の力を最大化するのに必要な多角的視点

ファシリテーター：芳賀朝子

参加青年：36名（JPY 17名、OPY 19名）

1. 目的とねらい

コースの目的

防災は持続的な発展を達成する上でカギとなるコンセプトであり、国家レベルのみならず、地域レベル、そして地球レベルで非常に重要である。政府の役割が不可欠である一方で、国家による活動や能力を補完する必要性は恒常的に存在しており、社会全体による参加と連携が求められている。このような文脈において、いかにして市民による自発的な活動によってコミュニティの強靭性を高めることができるだろうか。

本コースでは、経済活動・社会活動問わず、各PYが防災の視点を伴ったリーダーシップを発揮できるようになることを目的とする。

コースのねらい

あなた自身がどのレベルに属して活動するとしても、防災の取組に必要とされるリーダーシップには、明快なビジョン、計画、能力、所属するセクター内や他セクターとの間におけるガイダンスや連携及び関係者との協働という要素が含まれる。そこで本コースでは、市民社会組織（Civil Society Organization =CSO）による様々な防災活動事例に基づいたディスカッションを通じて、災害の定義、CSOの形態、複数セクター間の効果的な連携、災害リスクマネジメントの目的、CSOの説明責任と活動の終了基準、異なる立場間で対立する視点、ステークホルダーのモチベーションを高めるコミュニケーションの要素などを学習する。

2. 事前課題

2-1. プレゼンテーションの準備

自分自身がこれまでに参加した（もしくは関心のある）身近な防災の取組について、下記の要領でポス

ター形式のプレゼンテーション資料を作成する。

- ポスターに盛り込む内容として、氏名、出身国名、自国もしくは居住地域における主な災害の概要、身近な防災プロジェクト、その目的、内容、活動主体、社会的ニーズ、鍵となる要素、実施に当たって必要な資源（資金・人的資源・物的資源を含む）、対象、期間、成果、社会にとっての利益、評判、自身の見解などを含むこと。

- 仕様はA4サイズ1枚とする。文章だけでなく、写真やイラストなどを効果的に盛り込むこと。作成に当たってはパソコンあるいは手書きどちらでも良いが、必ずPDF形式のファイルにして提出すること。なお、原本はコース中にも使うため、紙媒体の形で1部持参すること。

2-2. エッセイを書く

自分自身が将来運営したい防災活動について、下記の要領で短いエッセイにまとめる。

- 氏名、出身国名
- 自身が将来取り組みたいと思う災害リスクと、その背景
- そのリスクに関心を持っている理由
- そのリスクが低減された理想の状態
- あなた自身の活動プラン

- 仕様はA4サイズ1枚、英文、Word形式で作成し、提出すること。なお、原本はコース中にも使うため、紙媒体の形で1部持参すること。



3. 5回のセッションの概要

セッション 1: 災害リスクについて理解する	
目的とねらい	活動の内容
世界の災害リスクについてお互いから学ぶ 「防災」の定義や防災活動の意義について考える	<p>PYは事前課題で準備した事例を三人一組のグループとなり発表し合った。プレゼンテーションには以下の情報が含まれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 自国もしくは居住地域における主な災害の概要 • 身近な防災プロジェクトの事例及びその目的 • 防災プロジェクトの活動主体 • 社会的ニーズ • 鍵となる要素 • 資源(資金・人的資源・物的資源を含む) • 対象 • 期間 • 成果 • 社会にとっての利益 • 評判 • 自身の見解など <p>災害の定義とその主な特徴について小グループで話し合い、結論を全員で共有する。PYは災害を定義する上での共通認識を得る。 各グループでの結論を国連国際防災戦略事務局(UNISDR)による定義と照らし合わせる。</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>PYは対話式のセッションを楽しみながら、災害についての理解を深めた。グループワークを通して、自然災害及び人災を含む様々な種類の災害に見られる特徴について、いかに深く考察するかを学んだ。 協力しながら作業することで、コース・ディスカッションのPY同士で生産的に共同作業できる関係性を作り、公平で平等な学びの環境で意見を交換できるようになった。</p>	
セッション 2: 異なるセクター間の効果的連携	
目的とねらい	活動の内容
防災活動を行う市民社会組織の形態や、他セクターとの効果的な連携について学ぶ 市民社会組織が直面しやすい対立課題について考える	<p>講義: 市民社会組織(CSO)の様々な形態及び多様なステークホルダー(利害関係者)との防災活動における効果的な連携について。CSO・企業・行政という三つの主なセクターについて中心的に扱う。 グループディスカッション: グループに分かれて、東日本大震災を題材とした以下のケーススタディに取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 災害後における被災者のニーズと、それに対応する支援者の想い • CSOが企業からの支援・資金提供を受けるに当たっての課題 • 危険を伴う活動にボランティアを派遣する前にCSOが検討すべきこと(例: 福島原発事故後の支援)
このセッションの主な学びと成果	
<p>近年の災害で見られた諸課題について、知恵を出し合いながら深く分析することができた。 今日の世界において、防災活動が実際に直面している課題の数々に対し、現実的な解決案を考えることの難しさを実感した。</p>	
セッション 3: 災害リスクマネジメントの目的	
目的とねらい	活動の内容
災害リスクマネジメントを人権の視点から考察する	<p>講義: 防災マップ、ハザード・マップとは ワークショップ: SWYの洋上生活を基にしたシナリオを使用し、災害図上訓練を実施。</p>

このセッションの主な学びと成果	
<p>船の上を一つの町に見立てた「SWY町」が被災したと想定し、災害図上訓練を実施。地震と津波が発生、4階まで津波が到達、住民が緊急支援を受けられるまでに三日間を要すること、全ての緊急アナウンスは日本語で伝達される、という内容である。PYは、配布された船のフロアマップを基に、危険箇所、集合場所、活用し得る資源などを図上で特定するハザードマップを作成した。</p> <p>PYは実践的な演習に参加する機会を得て、楽しみながら学ぶことができた。何日もの船上生活経験を通して自身の置かれている住環境を理解していたため、多くのPYが演習を身近なものとしてとらえることができた。</p> <p>災害図上訓練は使い勝手の良いツールであり、リスクに対する認識を喚起するのみならず、コミュニティの様々な関係者を防災・減災対策の意思決定プロセスに巻き込む方法として適していることに気付くことができた。</p> <p>多くのPYが、この演習は低コストで実施できる上に学びの多い教育ツールであり、各自のコミュニティに持ち帰って導入できると実感した。</p>	
セッション 4: 市民社会組織の説明責任と活動の終了基準	
目的とねらい	活動の内容
<p>支援者・受益者に対する市民社会組織の説明責任について学ぶ</p> <p>活動の終了基準を明確にするこの重要性について認識する</p>	<p>講義: CSOの説明責任とその重要性について</p> <p>ディスカッション: プロジェクトの終了について、東日本大震災のケーススタディを基に下記の項目について議論。</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの成功はどう測るか いつ活動を終了するか? また、その目安は何か プロジェクトを終了する時点においても、残された課題がある場合、何ができるか
このセッションの主な学びと成果	
<p>防災活動、特に緊急支援実施において、地域コミュニティ及び被支援者を始めとする、あらゆるステークホルダーと関わることの大切さを学んだ。また、誰(NGO・CSO)が、どんな活動を、いつまで実施する予定であるのかといった内容について、防災活動の最初から関係者に対して想定を明確にするこの重要性を認識した。</p> <p>良質な支援を提供するため、防災活動のマネジメントにおける支援の質と説明責任の重要性について、話し合った。</p> <p>プロジェクトを実施するに当たり、その防災活動の目的・提供される資源・支援期間に関する相互理解が大切であることを納得した。</p> <p>相互理解には、全ての関係者にとって明快な透明性のある方法で支援活動を実施する必要がある。これはプロジェクトの開始時から考慮されるべき重要な点である。</p>	
セッション 5: ステークホルダーの自発性を高めるコミュニケーション	
目的とねらい	活動の内容
<p>ステークホルダーのモチベーションを高めるためのコミュニケーションの要素を学ぶ</p>	<p>講義: 効果的なコミュニケーションのための三要素</p> <p>アーロン・アントノフスキーにより提唱される効果的なコミュニケーションのための三つの要素に従って分類。</p> <p>i) 「分かる(=把握可能感)」: 情報把握</p> <p>ii) 「できる(=処理可能感)」: 資源調達</p> <p>iii) 「意味がある(=有意味感)」: 各人にとっての利点・動機の源泉</p> <p>ディスカッション: 状況が理解できない、もしくは状況をコントロールできないことに対する恐れなど、何がストレスを引き起こすのかについて書き出す。またそれらのストレス要因を上記の三つの要素に照らし合わせ、分類する。</p> <p>プレゼンテーション: PYは二人一組になり、事前課題で準備した将来運営したい防災活動について発表する。</p>
このセッションの主な学びと成果	
<p>全員が、ビジョンを掲げるこの重要性について学んだ。</p> <p>誰もが、それぞれの人生においてストレスを経験しているが、PYはストレスの多い状況に対する認知の影響力について学んだ。</p> <p>もしストレスをチャレンジとして認識するならば、ストレスの原因を分類し(例えば、資源が足りないことに起因するストレスであれば、処理可能感に関わる問題と理解し)、それに対して建設的なアプローチができる。</p> <p>リーダーシップ・セミナーでの学びに関連付けて、ストレス(人生の衝動)とモチベーションは同一線上に存在するものであることを理解した。</p> <p>分類の三つ目の要素である有意味感も、防災活動には重要である。有意味感がなければ人々のモチベーションは低下するであろうし、状況改善に向けた努力をしようとする動機付けられることは無いであろう。</p> <p>有意味感に関して、もし明確に人生における「報酬」(金銭的もしくはその他)を意識、または何らかの大義に賛同するならば、当事者のモチベーションは上がるであろうし、行動に適切な優先順位も付けられることを参加青年は理解した。</p>	

4. ファシリテーターのコメント

本コース・ディスカッションの目的は、各PYがコミュニティのレジリエンスを高めるために、防災の観点からリーダーシップ能力を習得することであった。したがって、リーダーシップ能力の中でも、世界的な防災潮流の文脈における市民社会組織（CSO）の役割、人道支援のグローバル・スタンダード、多様なセクター間の効果的な連携、ステークホルダーのモチベーションを高める上で効果的なコミュニケーションの要素等についての理解に、指導の力点を置いた。また、コミュニティにおける潜在的なリスクに対する関心を高めるために、災害シミュレーションを通じた実習の機会も設けた。

事前課題は互いから学び合うための教材として活用され、PYはセッションを通して各自の様々な経験・関心・ビジョンを共有しあった。それぞれ固有のトピックやビジョンでありながら、バックグラウンドにおける違いを越えて大いに共感を覚えるものであった。

コース・ディスカッションは、いかに人道及び人権という共通の基礎に根差して世界中のCSOが防災活動を実施しているかという理解から始まった。未来のCSOリーダーとして、PYは各自の防災プロジェクトを計画・実施する上で重要な視点や手順について検討し、助けを必要とするコミュニティに適切な方法で支援することについて話し合った。将来、PYはここで得た知識を実践の場でいかしてくれるであろう。

また、やる気を引き出すコミュニケーション・スキルを身に付けるため、ストレス対処能力に関するアントノフスキー（1979）の「首尾一貫感覚(Sense of Coherence = SOC)」モデルを基礎とした、その中核となる三要素、把握可能感（「分かる」感覚）、処理可能感（「できる」感覚）及び有意義感（「意味がある」感覚）についてもコース・ディスカッションで育成した。ここで把握可能感とは、出来事が論理的で秩序があり、矛盾なく構造化されていると理解する程度を指す。また、処理可能感とは人が対処可能であると感じる程度を指し、有意義感とは、人生に意味を見出し、試練には立ち向かう価値があると感じる程度のことをいう。強いSOCは人生の満足度を高め、疲れ・孤独・不安を和らげるとされる。PYがこの理論を応用し、互いにビジョンを表明し、応援し合う関係を築いていく様子は、非常に喜ばしいものであった。この経験により、PYは社会貢献へと一歩前進する自信を高めた。

日本・インド・スリランカにおける課題別視察は、防災を担う主要なセクターとそれぞれの重要な役割に関する理解を促進し、コース・ディスカッションの目的に対して非常に有意義なものとなった。訪問各国で、CSO・学術機関・政府それぞれの第一人者の方々から説明を受けたことによって、これらのセクターが実際のところどのように作用し合い、協働しながら、それぞれの社会に

おいて防災を主流化しているかという包括的な理解が深まった。

全体的に、コースは主な目的とねらいを満たしたと言える。サマリー・フォーラムでのプレゼンテーションにも反映されていた通り、防災に関する学びは、アドバイザーセミナー、課題別視察、ホームビジット体験などを通して得られた多くの知識と照らし合わせることで、更に総合的に深まった。PYは積極的な市民となるための新しい視点やヒント、そして真の知恵を得てくれたものと思う。

しかしながら、本プログラムの効果を一層高めるために、いくつかの点については更に検討されるべきであろう。まず、OPYとJPYの間に見られる英語の理解力及び会話力の差異に関しては、初期の段階で大きな問題点として認識され、PYの間でオープンに対策が話し合われた。以降のセッションでは一貫して、PYは第二言語としての英語話者に対するコミュニケーション上の細やかな配慮を示し続けた。また、ファシリテーターからは、基本的な情報を記載した参考資料は英語と日本語のものを用意した一方、上級者の学習ニーズには英語の副教材を配布することで対処した。JPYに対しては、補習セッションも2回設けた。

二つ目に、コース・ディスカッションプログラムは、選択した領域に対する完結したアプローチを確立する機会として提供されている。将来的に改善するならば、いわゆる学際的なアプローチを取り入れ、PYが他のコースも副専攻として選択し、エクストラ・セッションとして受講できるようにしたらいかがだろうか。そうすれば、PYの多岐にわたる期待に、更に応えることができるように思う。

このたび防災コースのPYと共にいられたことは、大きな喜びであった。彼らは、一人一人が豊かなリソースを持つ個人として存在すると同時に、集団としての力を最大化し、SWYプログラムの特性を存分に発揮した。殊に、コース・ディスカッション運営委員が見せたすばらしいリーダーシップと、PY全員の活発な参加が、本コースを価値ある場に創りあげたことを特筆したい。PYが自分の地域コミュニティで、またグローバル社会において、リーダーシップを担ってくれることを期待し、彼らの輝かしい未来を祈念したい。

.....

5. 参加青年の感想

中村夏美（日本）

私の生まれ育った町は、東日本大震災によって多くの被害と犠牲者を出しました。この経験から、私は災害マネジメントに関心があり、防災コースを選びました。自分自身の過去の経験を踏まえてこのコースを受講したのは、私だけではありませんでした。コースにいる多様な